



釈迦如来像 京都嵯峨清涼寺蔵（秋山光夫論文参照）

塔

胎内から発見された文書によつて、この像は日本僧裔然が永観元年(983)に宋へ渡り、台州で開元寺僧や匠人張延皎らの助力をうけ、雍熙二年(985. 花山天皇寛和元年)に、いはゆる優填王釈迦瑞像の模刻を成就して、日本に将来したものである事が知られる。

羅什三藏絵伝

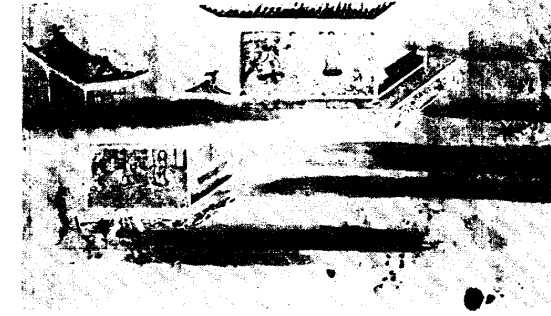
三下羅什三藏の又の序... 西行法師の撰... 三下羅什三藏の又の序... 西行法師の撰... 三下羅什三藏の又の序... 西行法師の撰...



西行法師の撰... 三下羅什三藏の又の序... 西行法師の撰... 三下羅什三藏の又の序...



西行法師の撰... 三下羅什三藏の又の序... 西行法師の撰... 三下羅什三藏の又の序...



(秋山光夫論文参照)

羅 什 三 藏 繪 伝 攷

秋 山 光 夫

我国に於ける宗教絵伝の題材として、高僧伝は藤原時代以来幾多の逸品が製作せられ、今に遺存するものも少なくないが、その大部分のものは、我国の高僧伝を画いたもので、異国の高僧伝を画いたものに至つては洵に少く、従来世に知られているものは、元暁、義湘を画いた華嚴縁起六卷(高山寺蔵)、曇鸞、道綽、善導、少康、法照を画いた浄土五祖絵伝一卷(光明寺蔵)、鑑真を画いた東征絵伝五卷(唐招提寺蔵)、玄奘を画いた法相祕事絵詞十二卷(藤田家蔵)の四種を挙げ得るのみである。右の中、元暁、義湘は高麗僧であり、善導、鑑真、玄奘等は唐僧である。然るにこの羅什三藏絵伝は中央亜細亞、龜慈国の高僧鳩摩羅什三藏(挿絵)を画いたものであるが、いまだその史料価値が世に知られず、倭錦、考古画譜、古画備考等の編者にも載録せられず、また絵巻関係の記事に富む古記録である看聞御記、実隆公記等にも記載されていない珍蹟である。

外は桐箱、内は時代老松修竹文金蒔絵の匣に納められ、明時代初期の精巧豊麗な牡丹孔雀文刺繍の古裂をもつて表装せられた一巻もので、紙本着色、詞二段、絵五段より成り、縦一尺一寸四分、横全長二十一尺七寸九分、紙数十一枚継ぎであり、裏面には膠やけ、糊しみさえ現われたうぶなもので、着色は少々剥落したところもあるが、全体の保存はまことに完好愛すべきものである。筆者については伝えるところがないが、その筆致賦彩には他の絵巻に類を見ない特色があり、稚拙なるが如くにして古雅の韻致がある。なかでも荒天怒濤の表現はことに優れており、筆者が凡手でないことを首肯せしめる。而してこの絵巻はその画態よりみて、倭絵系のもではなくて、漢画系と云うべきものであり、元・明風の仏画家の筆致が窺われるが、その描写は和化せられているので、同じく漢画家でも国立博物館蔵地蔵縁起よりも一層画趣がやわらかく、繊細で、感覚的なこまやかさがあり、こゝに筆者の芸術的個性が窺われ、その製作年代はわが室町時代初期と思考せられる。これとほぼ同時代と思われる清凉寺蔵融通念仏縁起二卷には各段ごとに筆者の寂済、土佐行広、栗田口隆光、藤原光国、春日行秀、法眼永春の六

人がそれぞれ署名をしているが、いずれも倭絵系の画人であつて、この絵巻の筆者とは系統を異にしている。現在のところでは羅什三藏絵巻の筆者を推定することは困難である。

さて、この絵巻に描れている物語は、鳩摩羅什が後秦の王、姚興に迎えられて、龜慈国から遠く長安の都に來り、詔を奉じて三千の学士と共に、数百卷に及ぶ梵本の經律論三藏を漢訳し、これを大衆に演説して、大乘佛法を弘通した大功德を表彰すると共に、羅什父子が印度から將來して支那へ伝えた釈迦如来の栴檀瑞像と我国に於て三国伝來と稱して人口に膾炙している



羅什像(仁和寺蔵聖僧像一巻の内)

清凉寺の本尊(口絵)との由来を併せて伝えんとしたもので、それは恰もかの清凉寺縁起絵巻と相通ずるものがあるので、或はこの羅什三藏絵巻も往昔は清凉寺に襲蔵されていたのではないかとも思われが、清凉寺縁起絵巻は狩野元信の筆であるから、時代的に見てこの羅什三藏絵伝の方が先行するのである。従つて両絵

卷に共通して画かれている「昼は羅什が仏像を負い、夜は仏像が羅什を負うて行つた」という同一場面の構図関係なども美術史的に興味深く観察される。

二

さて仏教が後漢の世に於て始めて支那に伝播せられ、次第に弘通して、牢固不拔の基礎を構えるに至つたのは、実に符堅西秦の時代であつた。ことに西秦の時代は上には衷心三宝に帰依した国王あり、熱心に仏法擁護の任にあたり、下には威徳英邁の高僧相継いで輩出し、各自経典の翻訳講説に尽粋したので、仏教史上他に多くその類例を見ないほどの極盛を致した。当時の所謂関中の四傑の一人である僧肇が劉遺民に答えた文中に於て

秦主道性自然、天機適俗、城壘三宝、弘道是務、由使異兼勝僧、方遠而至、靈鷲之風、辟於茲土。

と記しているのは正に当時の盛況を伝えたものであろう。而して斯の如き潑刺たる仏教活動の中心人物は実に鳩摩羅什であつた。

羅什はたゞに支那訳経史上に於て一新時期を劃したばかりでなく、支那仏教をして継紹時代から研究時代に躍進せしめた大功があつた。まことに羅什以後、南北兩朝を通して、仏教研究の潮流は滔々として冲天の勢を示し、遂に隋唐の世に於て、仏教々理の新組織が建設さるゝに至つた。されば羅什の伝訳した三蔵は支那仏教の中核として各方面に影響したのであつて、この点に於て羅什は八宗の祖と仰がれている竜樹が印度仏教史上に於けると同様の地位を支那に於て占めており、釈尊以来廿五祖として敬仰尊崇せられているのも当然である。

その偉大なる事蹟を伝えている文献資料としては、梁慧皎撰高僧伝(第三)や僧祐撰三蔵記(第十四)が最も古いものとて挙げられる。この二書の中、前者高僧伝は伝うところが史実に近い。この系統に属するものとしては晋書(九十五卷)列伝がある。後者三蔵記は誤伝を載せるところが多く、ことに大乘教に関する記事に於て然りと云われている。この系統に属するものには円照撰貞元釈教録(第六)、開元釈教録(第十四)などがある。この外、法苑珠林(第二十五)、広弘明集(第二十三)、神僧伝(第二)、法華伝記(第七)、三国伝記(第六)、仏祖統記(第四)、三宝感應要略(上卷)などがある。また羅什が漢訳した妙法蓮華経、梵網経、阿弥陀経を始め経律論数百巻はいずれもその学識を見るべき根本資料というべきものであるが、それらに附属されている諸家の序跋はまた羅什伝の好資料

である。以上は支那に於て書かれた関係資料を列挙したのであるが、なお我国のそれを覓むれば、先ず最も古いものでは平安朝に書かれた今昔物語及び打聞集であろう。鎌倉時代以後のものでは宝物集(上下巻)、三論祖師伝集(巻中)、浄土血脈論(巻上)、清凉寺縁起(六巻)、閑居の友(上巻)、花鳥余情(第十松風巻)などがある。しからばこれらの支那及び日本の資料と羅什三蔵絵伝、ことにその詞書と支那及び日本のこれらの資料との文献的關係は如何であろうか。

いま茲に絵伝を展舒して前後二段の詞書を見るに、前段は和文体で書かれ、紙継ぎ三枚、縦一尺一寸四分横長第一紙二尺〇八分、第二紙同縦長二尺〇九分、計全長六尺三寸三分ある。文章には錯簡脱落はなく、その文体は絵と同様に室町時代の作としての脈搏を感じしめるものがある。而してその羅什伝としての内容は高僧伝の系統を曳きながら、なお別系統である出三蔵記などをも参酌して、高僧羅什の事蹟に変化あらしめ、文脈にも躍動を与えている。従つて文詞の作成態度は歴史的批判的ではなくて、文学的信仰的であることは、這種の宗教絵巻の本質上、当然と云うべきである。然しながらこの詞書は必ずしも古文献を模倣的に引用して全文を点綴したものでなく、本文独特の記述の存することを注意したい。その一は羅什の生誕年代を「大真四年丑辛歳」と明記していることである。余の管見を以てすれば前述の諸文献の孰れも示寂年代については各異説をたてゝ論じているが、生誕年代については何も触れていない。然しそれよりも絵巻物としての芸術的価値の問題に関する重要記事は「荒天渡海、竜神出現」の一段である。これも余の管見によれば他の諸文献のいずれにも斯の如き記事を見ない。もちろん龜慈国から長安へ、天山北路を陸行した羅什が海を渡ることなどは地理的に考えて実際あり得ないことである。強いて考えればロブ・ノール湖であるが、それはあまりに附会の説となるであろう。しからば何によつてこの詞書の作者はこの一段を構想したのであるか。思うに

- (1) 梵網経百十二巻六十品の中で、羅什が漢訳して後世に伝えたものは心地戒品たゞ一品だけであること。
- (2) 梵網経の序文中に「弘始三年涼風東扇」して羅什が長安に来着した一句があること。
- (3) 梵網経の本文中に「黒風所吹船舫、江河大海羅刹難、亦応読誦講説此経律」と云う一文があること。

以上の三事の聯想から高僧伝にふさわしい神秘的な一説話を巧に創作したのである。即ち鳩摩羅什は水難救済に最も功德のある心地戒を誦しつゝ、梵網經全部を海に投じて竜神に供養し、怒濤を鎮め、無事渡海した。この時の誦誦によつて羅什はこの心地戒の經文を記憶していたので、後にそれを漢訳したのだと説明を加えている。然し「涼風東扇」とは実は暴風などの意味ではなく、却つて「順風が東方に向つて吹いたこと」、いいかえれば仏法が東方に向つて順調に弘通したことを象徴的に表現した語句などでである。それを逆に解釈して「荒天難船」の一段を加えたことは羅什伝に波瀾を与えたのみならず、この絵巻の単調を破り絵画的な精彩活趣を生ぜしめ、芸術価値を高揚せしめている。

次に第二段の詞書を見るに、これは漢文体で書かれており、その第一行には「姚奏三蔵法師鳩摩羅什奉詔訳此經」とあり、第二行に於て「姚秦者即後秦姚氏也」とか、「三蔵即經律論也」とか、「法師者伝訳弘通之也」とか注解を加え、次に羅什伝を挙げている。第一行の「此經」とはこの詞書から考察して、「法華經」を指していることが知られる。詞書の末尾には西晋の竺法護訳正法華、後秦の羅什訳妙法蓮華、隋闍那笈多訳添品法華などを挙げ、各時代の高僧がそれぞれ法華經を訳出して、異つた題名をつけたことを記している。この漢文体詞書は紙継ぎ二枚で、第一紙は縦一尺一寸四分、横長五寸二分五厘、第二紙は縦同、横長は二尺〇寸三分五厘、計全長二尺五寸五分あり、錯簡や脱落はない。斯の如くこの絵巻の詞書は前後兩段とも長文であり、現状に於て前段が卷頭に配されたのに対し、後段はもと巻末に配されて、兩段が序跋の位置をとつていたと思われる。斯の如き詞書は形式として異例ではあるが、この絵巻に先行して天狗草紙(根津美術館蔵)の如き類例もある。これより絵の各段につき考察を進めるにあたり、詞書全文を原本のまま左に挙げる。

三

【詞書】第一和文

第二十五祖羅什三蔵の父鳩摩羅什は中天竺の大臣なり。或時、大王彼大臣に勅し給ふ様は、朕はいまた代になからん政をせんと仰事ありし時、大臣の思はれけるは、いかにも謀をめぐらして、大善根をせさせ奉らんとたくみて、劫初より代になからん政は大善か大悪かにて侍るべきよしを奏給ひけるに、しからは大悪を成すへし、先三宝を滅せんとして、堂塔經論等を破損し、僧尼をころし給ければ、

案に相違して、しかるへからざるよしを頻にいさめ申されけれども、かなはさりしかば、これこそ善智識なれとて、則僧になり、鳩摩琰と号して、今の嵯峨の釈迦栴檀の瑞像(口絵)、法華、梵網、阿弥陀經等を負て、流沙葱嶺を過給ふに、夜は釈迦の像かたしけなくも鳩摩琰を負給て、東晋、建武元年^{戊寅}に丘慈国に来給けり、彼国の王、感悦し給て、崇敬甚しかりけるか、此沙門はたゞ人にあらず、彼種をつきて国の宝とせんとして、妹の姫宮遣して、鳩摩琰を春宮と成て、国の威を譲らんと宣旨有けるに、しかるへからすと勅答申されければ、此国のならひに、勅命に背くものは命をたつなり、しかれば法に任すへしとありけるにもとより捨たる身なれば、命をうしなはれん事もくるしからすとの給ひけれども、さすか人間に生をうくるならひ、命を

おしまぬ事もなし、又煩惱の根源をきることもかなはされは、つゝに勅にしたかひ給ぬ。さる程に姫宮懐妊し給ひしきわみ、鳩摩琰重病をうけて、今はかきりと見え侍し時、申し給けるは、我思の外の難にあひて、宿願をはたさずして空くならんこそ無念の事に侍れ。胎内の子は男子なるへし、相構僧になして我願をとけて、彼瑞像經論等を漢土へ渡し給へと宣給ければ、誠にしかるへし、遺言をそむき奉るへからすとの給しとき、今は思ふ事なしとて、すなはち終り給ぬ。さても姫宮はつきせぬ御名残にも、しなれぬならひなれば、月日かきなり時来りて、大真四年^{辛丑}歳に男子を誕生し給けり。さてそたて給へは、法器におはしましけるを、七

歳にして出家せしめて、学文をはしめ給ひければ、日誦三万二千言、九歳にして母とおなしく罽賓国の磐頭達多の会下に行て弟子と成給き。又十二歳にして母と共に、月氏に行給へとも、仏法滅て仏像經論もなく、沙門等も見えさることをなけき給ふところに、

ある山人の申けるは、あの北山のおくにこそ貴き羅漢はおはしまし候へと申すを聞給ひ、尋入て須利耶蘇摩にあひ、求法の志をのへしかば、蘇摩の云く、この小沙弥を見るに震旦にて大法を弘むへき瑞相ありと悦て、やがて弟子となし、大法秘術をのこりなく伝受して、丘茲国へ歸り給へとも、彼仏像經論を漢土へ

渡さずしていたつらに年月を送るところに、東晉に異星出現する事ありき。符堅王の勅し給ひしは異星出現のゆへをしらす、勘申へきよし宣下有しとき、関中大夫奏て申さく、外国に大徳の智人ある相なりと奏せしとき、大王の宣給けるは、けにさる事あり、丘慈国に羅什三蔵とて大得法の聖人有て、此国に来るへき瑞相なりとて、丘慈国の白純王へ勅使を遣されける趣は、西天の仏像經論聖人等仏法東漸の儀にて震旦へ来らんとし給ふ処に、無理に抑留の事そのころをえす、いそき渡し給らんと有しかは、丘慈国の帝の宣けるは、彼仏像經論聖人は此十二因縁ありて来給へり、いかなる子細によりて漢土へ

渡り給はんするに定め給ふやらん不審なり、所詮渡し申さぬまでにて侍るよし、三度まで勅答ありしかは、符堅王の勅し給ふ様は、今は大軍をさし向て丘慈国を打亡して、迎取へしとて、呂光將軍を大将としてせめけれとも叶はさりしかは、重て大勢を渡て数年の合戦にうち勝て、本尊經論聖人等を震旦へわたしける。海中にて涼風東に扇て大戦悉く破損せんとせしとき、船人共の申しけるは、いかさまわたし

給へる經論等を竜神のおしみ給へる故と覚え侍り、經論等を海中へしつめられて、万人をはたすけ給はんは

しかるへき大善根にて侍るへし、いかにおしみ給ふとも

經論も万人も皆々大海のちりとなるへしと申せば、羅什ちからなく梵網經一百十二卷六十一品を海へ入給ひける。名残おしきのあまりに海中へくり入さまに、

心地の一品を誦し覚給て、梵網經心地の一品、最後に誦出すといへり。さる程に風波しつまりて、海上難なく、弘始三年十二月に長安城に來脱し給へるを、秦王叡感有て、天竺三蔵羅什に奉詔して訳すとて、草台中におひて、三千學士、什と參定して、大小乘五十餘部訳して、唯梵網經最後に誦出し給て、融影明最等三百餘人一時に菩薩の十戒をうけて、別に心地一品を書出て、三百餘人おなしく誦すといへり。殊に阿彌陀經をもて、淨教を弘通して、寂し給へり。後秦、弘始十一年^辛辛亥八月廿日、日本は反正天皇六年なり。

【詞書】第二漢文

姚秦三蔵法師鳩摩羅什奉詔訳此經

姚秦者即後秦姚氏也。三蔵即經律論也。法師者伝訳弘通之人也。具云鳩摩羅耆婆、父名鳩摩羅琰。母名耆。是丘慈王妹。什從父母立名。此云童壽。什者以深善。此方文字之什華梵共拳故名。鳩摩羅什、自七歳出家。日誦三万二千言。九歳同母至罽賓国。彼有法師磬頭達多者。三蔵通曉、什依而師之。至十二歳同母至月氏。北山有羅漢。一見乃云此小沙弥將大弘佛法也。什公之母体道悟明位証三果。尋往天竺。臨行語什曰、方等諸經汝必大闡震旦。唯汝自無少益耳。什言、若使大化流伝、雖泥犁苦何憾。還復丘慈。悟大乘法要。其磬頭達多友於什。時前秦符堅僭号。関中大夫奏、有異星現外国、当有大徳智人、入輔中原矣。堅曰、朕聞西域有羅什者、將非是耶、尋遣呂光等、統兵西伐丘慈。光曰、朕聞有羅什者、深解仏乘。矧賢哲者国大宝也。光克丘慈。因得羅什。還至涼州。而符堅已為姚萇所害。光遂僭号関外。光死其子襲位至干呂隆。已經十八年矣。萇復卒。其子興立。弘始三年有連理枝生于廟庭。有葱数畦悉變為蒞峭香草也。瑞異既作。秦王遂西伐。呂隆方迎得什。師人関。以其年十二月至野安。訳諸經論。統於偽秦。弘始

十一年入寂。垂終誓曰、若平時翻宣無誤俾火後舌不焦黒。至闕維竟其舌作紅蓮華色。什公位証三賢訳經首從七仏其來尚矣。

西晉恵帝、求康年中、長安青門^{初翻有十卷・題名無妙蓮}煇菩薩竺法護者初翻此經、名正法華。東晉安帝隆安年中、後秦弘始丘慈沙門鳩摩羅什。次翻此經、名妙法蓮華^{次在西晉之後翻仍加妙蓮}。隋氏仁壽大興善寺北天竺沙門闍那笈多所翻同名法^{闍那笈多二師同譯添品法華}。

四

今、上記の和文及び漢文の詞書を味読して高僧鳩摩羅什の性格と生涯が髣髴として眼前に浮ぶと共にこの絵巻に展開された五段の絵を鑑賞して史興湧然たるものがある。然し各紙の接合順位には多分に錯簡があり、従つて現状に於てはその構図の連絡は詞書の筋に合致していない。この絵巻が現在の如く接合装幀せられたのは、その古び具合より見て、江戸時代のことと思われるが、斯の如き錯簡を生じたのは、この絵巻の構図法が一紙一図の形式を採らず、云わば各紙を通して循環的複合形式を探っているの、各紙破損剥落した場合の修理の際、構図連絡の理解がむづかしかつた

為めであろう。なおこの絵巻は詞書の様子から考えても長巻ではなく、たとえ脱落欠失の部分があつても数紙に過ぎないと思われる。いま現存各段につき、その復元的順位を表示すれば左の如くなる。

現状	内 容	料 紙	復原
見返(色紙)		縦一尺一寸四分 横一尺	○見返
詞一(和文詞書)		横二尺〇八分 横二尺〇九分 横二尺〇六分	I 詞一
絵一	羅什荒天渡海。経を海に投ず	横二尺〇六分	II 絵二
絵二	父琰仏像を負い丘慈に行く。羅什十二歳母と羅漢を訪う	横二尺〇九分	III 絵四
詞二(漢文詞書)		横 五寸二分 横二尺〇 三分	III 絵一 V 絵三
絵三	羅什長安にて訳経す	横二尺〇五分	VI 絵五
絵四	父琰丘慈王に仏像を奉る父琰王妹と結婚し羅什生る	横二尺〇五分	VI 詞二
絵五	羅什長安に講説授戒	横二尺〇八分	
奥付(白紙)		横一尺六寸八分	○奥付

これより右に表示した復原順位に従い、各段の図について解説することとする。

第一段は怒濤さかまき海浜、老松の彼方、雲霧になびく荒野を、巻脚絆の旅僧が金色の仏像を負うて来り、また仏像が旅僧を負うて行く。これ鳩摩羅琰(羅什の父)が、当時排仏の甚しかつた中天竺(印度)から仏法を救うために、自ら大臣の位を捨て、僧となり、優曇王の造つた有名な梅檀釈迦瑞像を震旦(中国)に伝えようと、詞書にある如く「釈迦梅檀の瑞像、法華、梵網、阿弥陀経等を負て、流沙葱嶺を過給ふに、夜は釈迦の像かたしけなくも鳩摩琰を負給て」とあるところである。この瑞像は羅什が父の意志をつぎ、中国に伝へ、宋時代に及び、太平興国八年入宋の日本僧裔然が仏師長栄に模作せしめて、京都の西郊、嵯峨の清凉寺に将来したもので、増鏡の巻頭にも、この釈迦像のことを述べて「如来二伝のおんむつまじさに」としているものである。同寺の清凉寺縁起にも、前述の如く狩野元信がこれと同様の場面を画いている。この説話は中国の高僧伝や法苑珠林などに記載がありそうで実はなく、却つてわが国の今昔物語やこれと同系統の打聞集などに詳記されている。信濃の善光寺如来が僧善光を負うて行つたという説話もおそらくこの清凉寺釈迦像の説話から脱化したものであろう。

斯して琰は東晉の建武元年に西域の丘慈国に到着した。丘慈国は「天竺ト震旦トノ間、各遙ニ離レタル国也、来タリシ方モ去リ、今行ク末モ未ダ遠シ」と今昔物語も云つているように、中央亜細亜の僻遠の地にありながら、東西交通の要衝天山北路に位置したので、当時文化の華を開き、ことに仏教隆盛であつたが丘慈王は琰を迎え、感悦して、釈迦の瑞像を別殿内に安置し、篤く崇敬礼讃した。第二図上部の光景は即ちそれである。その下部に画かれた別殿内の光景は亀慈王の妹耆婆が琰と結婚してもうけた愛児、鳩摩羅什をかこんで侍女等と団欒のさまである。然し琰は羅什の誕生前に示寂した。時に東晉の建元元年であつた。琰は夫人耆婆に遺言して、わが子は必ず出家して、震旦(中国)に仏像経論を伝え、仏法を弘通すべきをもつてした。夫人耆婆は聰明にして梵漢語に通じていた。翌建元二年(西歴三四四年・詞書は大真四年と記している)羅什は誕生、七歳にして出家、十二歳にして母と共に求法のため月氏国に旅行した。その光景は第一段にさかのぼつて、琰が同じ画面の海浜に、羅什母子一行の旅姿を画いている。斯の如く同一画面に異つた時所の光景を画いたものは、余の所謂循環的複合形式の構図である。この画面中央は母耆婆であり、その傍に日傘を持ち剃髪の頭に日よけて立つているのが、愛らしい青道心の鳩摩羅什であり、旅具を担う従者三人の外、疎林の傍に斧を持ち腰をおろして遙かかなたを指して語つているのは樵夫である。花咲き柳かすむかなた、峨々たる山懐に茅屋が画かれている。これが樵夫の教えた北山で、貴い羅漢、須利耶蘇摩のすみかである。羅什は母と共に蘇摩を訪ねて弟子となり、大法秘法を伝受せられ、且つ震旦に大法を弘むべき瑞相ありと予言せられて、丘慈国に帰着した。その後、建元十八年(西歴三八二年)前秦の符堅王は呂光將軍を遣し、丘慈を攻めた。そのために丘慈国の白純王は戦死したので、侵入軍の呂光將軍は瑞像経論に併せて羅什をも奪い捕つて、その根拠地たる涼州の姑蔵に帰つた。時に羅什は四十歳であつた。而して絵巻の第三段荒天渡海の光景はこの時の出来事として画かれているのである。怒濤さかまき、電光とび、数艘の軍船が覆没せんとしているところに出現した竜神に向い、經典を海に投じて供養している黄衣の僧は鳩摩羅什である。この図は全巻中最も高調に達した画面で絵画として巻中で最も優秀の場面である。然しその内容は史実ではなく、前述の如く梵網経に所依して、涼風東扇から着想して作されたものである。なおここに創作心理上の

問題として、地理的智識の狭隘であつた當時に於て四面環海の日本人が遠隔の地を想像する時、大海の存在を考え、渡海の艱難を思うのは先天的な觀念であつた。この絵巻の舞台はすべて大陸の中心地方であるから、海のある筈はないのであるが、第一段に於ても、第三段に於ても海を画いているのは、全くこの心理の現れである。

後秦の苻堅王は、その後、姚萇に殺害されたので、呂光はそのまま後秦には帰らず、独立して涼州に君臨して、王位に即き、年号を太安元年（西歴三八五年）と称した。東晉の隆安三年（西歴三九九年）呂光が歿したので、その子紹王が位に即いたが、内訌が続き、羅什は空しく涼州に停住していた。しかるに後秦の姚萇及び姚興は羅什の高名を敬慕して、熱心に招請に力を尽くし、遂に弘始三年（西歴四〇一年）十二月二十日、羅什を国都長安に迎えることに成功し、国師の礼をもつて厚遇した。羅什は長安に到着した翌弘始四年から同十五年まで、前後十二年間、西明閣及び逍遙園に於て、関中の四傑僧叡、僧肇、道生、道融を始め数千の門弟と共に、梵漢の語学力と卓抜の学識とをもつて翻譯講説に従事した。また融影、明最等三百人に一時に菩薩戒を授けた。その盛大な光景を画いたのが、第四段と第五段とである。而して構図上から見て、この絵巻はこの第五段をもつて完結しているものと思われる。羅什訳経の浩漭なことは唐代の玄奘を除いて空前絶後であり、出三蔵記集は三十五部二百九十四巻と伝え、歴代三蔵記は九十七部四百二十五巻と伝えているが、開元釈教録の七十四部三百八十四巻が正鵠を得ていると称せられる。若し斯る多数の仏典の漢訳がなかつたとしたら、仏教の弘通ひいては東洋の精神文化への影響は如何であろう。洵に鳩摩羅什が訳経者としての大功は現在の日本に於て痛感される。羅什学説の根本は大小両乗の調和にあり、注維摩経巻六に「仏法に二種あり、一には有、二には空、若し常に有に在れば即ち想著に累し、若し常に空を觀ずれば即ち善本を捨つ、若し空と有と迭用すれば即ち二過に没せず、なほ日月代用して万力もつて成るが如し」と説破している。

羅什の歿年に就いて、慧皎梁高僧伝は「諸記不同、或云弘始七年、或云八年、或云十一年、尋七与十一字或訛誤、而訳経録伝中猶有一年者、恐雷同三家、無以正焉」と云つてい、歴代三蔵記も十一年説であり、この絵伝も同種である。開元釈教録（第四）は十一年説を駁して十四年の末になお生存したと主張している。円照撰の貞元釈教録（巻六）は僧肇の書いた羅什の誄

の中に「丑癸之年、年七十、四月十三日薨于大寺」とあるように羅の示寂を弘始十五年（西歴四一三年）と記している。最も当を得た説である。誄は広弘明集（第二十三）に収録されている。なおこゝに解説の筆を擱くにあたり、羅什の性格とその訳経に対する自身と責任とを最も良く表現した逸話を附記したい。羅什は臨終にあたり、「誓曰、若平時翻宣無誤俾、火後舌不焦黑、至閻維竟其舌作紅蓮華色」と云う。まことに羅什生涯の面目躍如たるものがある。

五

以上をもつて羅什三蔵絵伝の史的内容の解説から復原の問題を考察したが、その後再び全巻を展覧して、この絵巻の芸術美を鑑賞したい。本巻の絵は室町初期の特色をよく發揮しており、元来明初の画風を和化して而かも漢画の特徴を失わず、遠い絵因果経に見るような古雅愛すべき稚拙さがあると共にまたさすがに近代にちかい感覚的な繊細さを持つている。

五段の絵のうち訳経及び渡海の兩段はかゝる趣致を見るべき優秀の作である。その線描は波濤、松樹、山岳などに於てよく漢画の特徴を發揮している。その著色も岩絵具を塗抹するのではなく、墨絵に於て墨をあつかうのと同様に筆触の見えるほどに速度のある運筆で描写している。だから絵が死んでいない、生きている。第三段の暴風怒濤の一図は最も精彩あり、活趣がある。ことに効果的なのは白群に映発する金泥の乱雲である。金泥の使用も筆蹟が見えるほどの勢がある。しかし決してあらあらししくはなく、感覚的で繊細である。かゝる金雲の中に一線二線光るのは截金をもつてした電光であつて、絵巻としては珍らしい手法である。やはりこの絵の筆者は仏画家系統であろうか。岩絵具は相当あらいものを濃厚につかつている。竹・柳・松の葉の緑青がそれである。それがため剥落したところもあるが、それが絵の味にもなっている。車輪型の松の葉の描写例としても日本画中古いものである。白群に銀泥をたつぷりとまぜて自由に描いた遣り霞も珍らしいが、この筆者の最も成功した描写は、狂瀾怒濤と荒天の乱雲とこれに配する蛟竜とによつて表現した暴風の光景である。この筆者に大きな迫力を期待することは出来ないが、感覚的な写実味に於て優れたものがある。しかしかゝる筆致も人物描写、屋台描写となると、愛すべき稚氣を帯びて来るのもこの筆者の特色と見られる。まことにこの羅什三蔵絵伝の出現によつて数少ない高僧伝に特色ある一本を加え得たことは斯道のため慶賀すべきである。